

# 石垣の中の博物館

## 仙台城の調査から

仙台城跡では、石垣解体に伴う調査が終盤に近づきつつある。近世城郭石垣調査で、石垣背後の地山までを掘削し、内部の構造や築造過程までを解明した例は初めてであった。さらに、解体した1つ1つの石材も精査し、そのデータベースを構築しているという点でも画期的である。近世城郭研究の歴史に名を残す調査であることは間違いない。そんな画期的な調査も間もなく終わろうとしている。その現場を尋ねたところ、調査員の御好意で間近に様子を見ることができた。現段階で判明していることを紹介してみたい。



この調査区では3時期の石垣の変遷が確認された（「城踏」8, 9号参照）。上の写真で説明すると、赤枠がI期（築城期）、黒点線内がII期（元和の大地震崩壊後の改修）、青線以下がIII期（伊達騒動頃）となっている。ちょうど北東隅の裾部まで石垣の解体が進み、3時期の石垣の位置関係が1ヶ所で観察することができた。この一連の石垣構築では、古い石垣を埋め込んで、その外側に新規に石垣を積んでいる。姫路城でも大天守の石垣は、秀吉期天守台を埋め殺して大きな天守台を築いている。理由ははっきり断定できないが、新規に築く石垣の強度を高め安定させるための処置かもしれない。あるいは、矢印の部分はII期石垣をうまくIII期石垣に転用しており、工期短縮の効果を狙っていたのかもしれない。

築造の技術や工程については、今後調査が進み、成果がまとめられることで遅かれ早かれ研究の深化がみられるだろう。その点で、この一連の仙台城跡の調査が、日本近世城郭の研究史に大きな足跡をしるすことは間違いない。



III期石垣の栗石の様子。前ページで矢印を付した場所。青いシャツの作業員のところの石はII期石垣が、III期石垣の積み石となっていた箇所である。全体として、旧石垣の積み石は、うまく再利用されているように見受けられた。



写真中央に横長に見える土は、城のある青葉山の岩盤の地層である。北面の石垣は岩盤を削って、石垣と岩盤の間に栗石を充填している。岩盤の掘削は困難だったであろう。こういう箇所では、栗石層の幅は狭くなっている。それにしても、岩盤を削ってまでその前面に石垣を構築する意味は奈辺にあるのだろうか。

大詰めを迎えている仙台城跡の調査。その概要については、右の冊子で知ることができます。うまくまとめられているだけでなく、カラー写真を効果的に使用してとても見ごたえのある資料です。文化財といいながら観光主体の内容になりがちなものが多い中、仙台城とはどんな城であったかを考古学的事実を踏まえてうまく伝えていきます。400円とは安い買い物です。仙台市教育委員会文化課発行。仙台市役所市政情報センター等で頒布。



ここでもうひとつ注目されているのは、「良櫓」の復元問題です。この詳細な調査によって、III期石垣の東北隅に「良櫓」は存在せず、II期石垣の上に建っていたことがわかりました。積み直すのは解体前にあったIII期の石垣。その上に「良櫓」を建てるのは歴史的事実に反するという立場と、「開府400年」のシンボル、新たな観光資源としては、III期石垣の上に建てざるを得ないとする立場があるようです。いずれにせよ、仙台市民のセンスが問われそうです。



"Shiro Fumi" No.20 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.